



神金公民館だより

第186号

2025年
9月1日

今年も 厳しすぎる残暑

山梨県に発表された熱中症警戒アラートは、昨年は31回でしたが、今年はすでに29回（8月17日時点）となっています。過去最高の暑さだった昨年を上回る暑さとなりそうです。

厳しすぎる残暑が続くことが予想されている中、暑さによる体への負担が大きくなっていますので、十分な睡眠時間の確保や栄養補給など、日々の体調管理を心がけていきましょう。

子どもまつい

9月28日(日) 16:30~

会場：神金小学校グラウンド ※雨天時は体育館実施予定

◎グラウンドの一部を駐車場として利用予定

イベント内容

焼きそば・フランクフルト・ポップコーン
射的・くじ引き・花火等

◆参加費は無料ですので、多くの方々の参加
をお願いします



昨年の子どもまつりの様子

神金トピックス&ニュース

防犯カメラ活躍中



神金振興会で、国道筋（大菩薩線）と県道筋（二本木線）にそれぞれ3カ所ずつ防犯カメラを設置しました。電気料などの管理費用は振興会予算から支出しています。

神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

郷土の人 一

昔から神金には有能な人が多くいた。全般的に性格が素朴で不撓不屈の精神に富んだ感がする。負けず嫌いの点があり従って多少気性も酷しい。これは自然環境が斯くあらしめたものと思う。西方へ傾く傾斜地で農耕地は少なく肥沃でもなく、水害のたびに耕地は流されて生活は楽ではなかった。加えて風も荒く酷しい。

神金村は明治八年上萩原村、上小田原村、下小田原村が合併して誕生した。神金村と名付けた由来は上萩原村の神部神社と下小田原村の金井加里神社の頭文字を用いたのである。昔から三ヶ村は地形も産業も等しく、萩原口留番所は三ヶ村の責任にて守られており、そのために特権も与えられていた。尚、萩原山入会十ヶ村組合に於いては三ヶ村は常に協力し合い、十ヶ村入会組合をリードしたのみでなく県下の入会組合の頭領格であった。優れた人材も多く出た。

丹波山村との境界争いの代表者の矢崎六郎衛門、明治五年大小切騒動の折りに万力筋・栗原筋の全村が参加したが、下小田原村だけが参加しなかったがこれを指揮した名主の古屋富賢、明治八年新青梅街道の開鑿の責任者矢崎治兵衛（清信）、明治四十三年村政が乱れ県の職務管掌を受けた後を引き継ぎ村政を立て直した矢崎正朗等の人材が出た。中でも特筆すべき人が二人いる。一人は上萩原出身の木食白道上人と岩波出身の田辺治通である。

木食白道上人は寛延三年（一七五〇）上原の小野与左衛門の子として生まれ幼名を宋安と称した。父与左衛門は病弱にて家計も貧しく家の負担になることを憚り家内相談の上巡礼となり家を出ることを決意した。このことを知った当時六歳の宋安は父を慕い共に巡礼になることを泣いて懇願した。父は願いを認め、宋安は菩提寺である法幢院にて剃髪し西国巡礼の旅に出た。四国遍路の途中伊予の国（愛媛県）にて父は死亡。宋安は孤児になったが近くの人に拾われ養われた。二十四歳の頃母恋しさの思いにこらえきれず養父母と別れ甲州を目指して旅立った。伊豆の辺りにて木食僧行道上人と出逢い行道の弟子になり、木食戒を修め名を木食白道と改めた。

*次ページに続く

神金の歴史

木食僧は五穀（米・麦・粟・黍・大豆）を食べず木の実や山菜を食べて、妄想・妄念から逃れ、清浄の精神を保持するために修行した。木食僧の最終の理想は蛋白質も脂肪も体につけず、死亡したならばミイラになって、弥勒菩薩が将来この世に出現した時再び生まれ変わって弥勒菩薩に救って貰い極楽浄土に行くことを目的として信仰した。

白道は師行道に従い奥州を経て北海道に渡り二ヶ年余り滞在し造仏・納経の旅を終えた。再び奥州各地を廻り安永九年（一七八一）栃木県菊沢村栃窪に約五ヶ月滞在し観音堂を建て、薬師如来・脇侍・十二神将像を刻み納めた。その十五体の仏像の内四体には、相州伊勢原・日本廻国の行者行道同白道と連署した墨書がある。その後白道は栃窪を出発し信州長久保にて師の行道と別れ。単身にて白田・川上村を経て郷里に帰った。

二十余年ぶりに母や妹と涙の対面をし。母のもとにしばらく滞在した。その後、三日川山に入り栃の木を切り仏像を刻み、親類や近所の家々に贈って大変喜ばれた。

白道は菩提寺法幢院に移り、六体の地藏尊を刻み奉納安置した。又、木食僧としての厳しい修行によって体得した加持祈祷により迷える人や病む人を救った。その噂を聞いた近郷近在の人々が法幢院への参詣者として次第に多くなり、お礼や護符を千体くらい作ってもすぐに売り切れた。夜ごもりの信者は八百人も千人もと増え、法幢院の縁側にまで人で一杯になるという凄まじい繁盛ぶりであった。甲府、北筋、西郡は申すに及ばず河内、郡内、信州、駿州からも参詣人は訪れた。そのため千野橋通り、赤尾橋通りに茶店、水菓子売り、休処、餅、蕎麦、素麺等の出店が一丁おきに出た。寺の境内には商売人が店を並べ、押すな押すなの盛況ぶりであった。境内で歌舞伎芝居も興行された。

しかし、その繁栄も長くは続かなかった。法幢院が大繁盛したことが他の寺院からの羨みから妬みとなり、本寺の永昌院や僧録司が本末体制という規則を無視して勝手に活動をしたことを理由として、白道は法幢院から破門されてしまったのである。

傷心の白道は上原の上原寺の住僧となり、これまでに依頼された仏像をここで彫刻したのである。下小田原にあった阿弥陀堂（明治初年奥野田村西広門田組に売却）に住んでいたという説がある。上條の観音堂にある一木百体観音や福蔵院の百体仏はここで彫刻されたと想像される。

（参考資料）萩原木食繁昌古日記、萩原木食繁昌

木食白道 木下達文著

赤尾保坂家所蔵